

協同学習のための学習環境の構築

-思考ツール・ICTを活用した協同学習の実践と学習環境の整備・改善-

学籍番号 169965

氏名 富永 昌勲

主指導教員 山手 隆文

1. 背景と目的

未来社会に生きる子どもに必要な能力とは、OECDの「キー・コンピテンシー」やPISA型学力からもわかるように、知識の習得だけに終わらず、実社会でも活用できる基礎的・汎用的能力といえる。基礎的・汎用的能力の獲得にあたっては、「思考力・判断力・表現力」の育成が必要とされる。全国学力・学習状況調査の結果から、実習校においても「思考力・判断力・表現力」に課題があり、言語活動の充実を旨とした授業改善が必要であることがわかった。新学習指導要領では、言語活動を充実させるには、子ども同士の意見交換、話し合いを活発に行う相互交流の多い協同的な学びが有効であると示している。また、授業改善と同時に協同学習のための学習環境（人的・物的環境）を構築していくことも必要である。

本研究の目的を、基礎的・汎用的能力を育成するために、(1)多様な視点からの学校課題を分析し、改善案を提案すること (2)思考ツール・ICTを活用した協同学習の授業モデルを開発し、実践すること (3)協同学習のための学習環境を整備・改善について検討することにした。したがって、研究を第I部、第II部、第III部で構成した。

2. 研究方法

第I部 実習校の課題の分析

【目的】実習校の課題について、学力実態や人的・物的環境の視点から分析し、それぞれの分析結果から協同学習のための学習環境の構築に向けたアクションを提案する。

【方法】(1) O市が実施している学力経年調査結果から学力実態を分析する。(2) 実習校と同研究テーマで校内研修を進めているT小学校との校内研修を比較し、分析する。(3) 実習校と学力向上や校内研修の実践に優れている10校との学校環境を比較し、分析する。(4) それぞれの分析結果から協同学習のための学習環境の構築に向けたアクションを提案する。

【結果・考察】実習校の課題を分析した結果、実習校では①O市が実施している学力経年調査の結果から、「思考力・判断力・表現力」や活用

問題②校内研修においては、T小学校の校内研修チェックリストの比較から、評価・改善や系統的なカリキュラム開発③学校内の学習環境においては、特に教室外の環境整備や学校外への情報発信の3点に課題があることがわかった。したがって、この3点の課題を改善し、協同学習のための学習環境の構築に

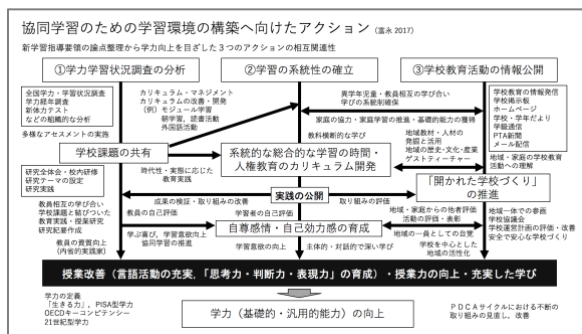


図1 協同学習のための学習環境の構築へ向けたアクション

向けたアクションとして、「全国学力・学習状況調査の分析」「学習の系統性の確立」「学校教育活動の情報公開」を積極的に進めていかなければならないことが明らかになった。

第Ⅱ部 協同学習に向けた授業改善

【目的】言語活動を充実させ、「思考力・判断力・表現力」の育成に向けた授業改善の一例として、思考ツールやICTを活用した協同学習の授業モデルを開発・実践し、結果を検証する。

【方法】(1) 社会科で思考ツール・ICTを活用した協同学習の授業モデルを開発・実践する。(2) 「考えるテスト」や授業アンケートから児童の「思考力・判断力・表現力」や学習意欲の変容を検証する。

【結果・考察】学習前後のアンケート結果から、「教科書や資料集から知りたい情報を調べることができますか」と「自分の考えを深めるのに友だちの考えは役に立ちますか」「自分の考えを友だちに説明することはできますか」の相関が生まれていた。また、「考えるテスト」の結果から思考ツール・ICTを活用することで、児童は友だちとの交流を通して情報を組み合わせ、言語表現することができるようになっていくことがわかった。児童の意識には大きな変化が見られなかったことから、学校内で組織的な校内研修を進め、更に成果を確かめていくことが必要である。

第Ⅲ部 協同学習のための学習環境の整備・改善

【目的】第Ⅰ部の成果を活用し、協同学習のための学習環境の構築に向けたアクション「全国学力・学習状況調査の分析」「学習の系統性の確立」「学校教育活動の情報公開」を実践する。

【方法】O市のがんばる先生支援グループ研究と協同して学校内の学習環境の整備・改善を進める。

【結果・考察】職員全員で全国学力・学習状況調査の問題の分析から言語環境を改善し、授業に反映していくことが確認できた。そして、教科横断的な協同学習の実践や教員同士の学び合いなど、いくつかの学年では総合的な学習の時間のカリキュラム開発が実現した。学校教育活動の情報公開は、徐々に進んでいるが、まだまだ取り組みに温度差があり、積極的な情報公開には至らなかった。この原因として考えられるのは、個々の教員の意識の違いであった。教員の協同については、ミドルリーダーの活躍が重要であることを再確認した。

3. 総合考察

協同学習を進めていくためには、授業改善ならびに学校内の包括的な学習環境を構築していくことが必要になる。授業においては、教師は児童の交流を促進するための「情緒的サポート」「情報のサポート」「道具的サポート」「評価的サポート」を組み込んだ支援をすることで、言語活動が充実し、思考力・判断力・表現力が育成されていくと考えられる。思考ツールやICTの活用はこれらの役割を担う効果的なツールであることが明らかになった。

学習環境においては、人的環境と物的環境の整備・改善は深く結びついており、相互作用していくものである。そして、両者は教員の協同により実現し、学校の研究推進文化を形成していく。学校における実践研究の発展要因として、管理職のリーダーシップの充実、実践的リーダーの活躍、研究推進文化の3者のバランスが大切である。実習校では、このバランスに歪みが生じていたため、学校改善が機能しなかった一面があった。したがって、これらの相互作用を促進するための調整能力が実践的リーダーに求められる。学校改善をするにあたり、時代の流れに伴って何を「不易・流行」とするかは、今後も検討されていくべき課題である。